



TITLE:

フツサールの現象學(三)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. フツサールの現象學(三). 經濟論叢 1925, 20(4): 640-655

ISSUE DATE:

1925-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128269>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷十二第

行發日一月四年四十正大

論叢

土地國有に關する諸說概評……………法學博士 田島 錦治

フッサールの現象學……………文學博士 米田庄太郎

日銀物價指數の研究……………法學士 汐見 三郎

御家人の特質……………文學博士 三浦 周行

時論

物價と租税の不公平……………法學博士 神戸 正雄

說苑

朝鮮の雜種農業……………法學博士 河田 嗣郎

貨幣の對内及び對外價值の變動と貿易並びに爲替との關係……………經濟學士 谷口 吉彦

雜錄

統計的研究に於ける選擇意思……………經濟學士 岡崎 文規
 海運同盟の研究に就いて參考資料……………法學士 小島昌太郎

フッサールの現象學 (三)

米田庄太郎

(四) 「純正現象學及び現象學的哲學考」

に於ける現象學の一般的概念

前節に述べし如くフッサール氏は、「論理學的研究」に於ては現象學を純正論理學の豫備學と考へて研究して居たのであるが、然るに其の後現象學の研究を益々進め且つ深めるにつれて、其の根本的重要を愈々深刻に認識し、遂に之を以て哲學の基本學 (die Grundwissenschaft der Philosophie) と認め、そうして現象學によりて始めて哲學は一般的に嚴密なる學となり得るものと考へるに至つた。此の思想は千九百十年「ローゴス」に於て公にされた論文「嚴密なる學としての哲學」(Philosophie als strenge Wissenschaft) 中に簡單に論述されて居るが、更に千九百十二年に公にされた「純正現象學及び現象學的哲學考」第一卷「純正現象學一般的序論」(Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie) に於て、組織的に詳しく論述されて居る。但し本書は今日に至るまで只右

の第一卷が公にされて居るだけで、他の二卷はまだ刊行されて居ない。それで吾人はまだ同氏の現象學的哲學の全體を學ぶことが出来ないで、只右の卷によりて純正現象學の方法論を學び得るだけである。しかも其の方法論が今日獨逸の社會學の發達に重大なる影響を及ぼさんとして居るので、吾人は少なくとも其の大意を心得て居るに非らずば、今日の獨逸の社會學の發達や、又其の將來の發達の方針に就て、正當なる理解及び推測をなし得ないのである。それで余は是れまで述べ來りし處によりて、フッサール氏の現象學の概念の由來を究明したから、是れより更に「純正現象學及び現象學的哲學考」第一卷に於ける同氏の大體上完成せる現象學の概念及び方法論の大意を、特に夫れが社會學方法論と重要な關係を有する方面に就て、稍々詳しく説述したいと思ふ。

「純正現象學及び現象學的哲學考」第一卷は、緒論、第一部「本質及び本質認識」(Wesen und Wesenserkenntnis)、第二部「現象學的基本考察」(die phänomenologische Fundamentalbetrachtung)、第三部「純正現象學の方法論及び問題論に就て」(Zur Methodik und Problematik der reinen Phänomenologie)、及び第四部「理性と實在」(Vernunft und Wirklichkeit)に別たれて居るが、先づ緒論によりてフッサール氏の純正現象學の概念の一般を述べることとする。

夫れ哲學の基本學としての現象學は、其の名稱が表示する如く「現象」の學である。併し總ての

科學は現象を對象とするものであるから、單に現象を對象とすると云ふだけでは、現象學は決して新しき學であるとは云はれない。しかも余輩が現象學を新しき學として建設せんとするのは、是れ其の現象を考察する立場（die Einstellung）が總ての科學とは根本的に異なる全く新しきものであるからである。そうして現象學の其の新しき立場をよく理解することは、吾人が一切の經驗科學に於て一般に行なはれて居る思惟習慣に囚はれて居る以上は、全く不可能である。現象學の立場は一切の經驗科學のとの立場、即ち自然的立場と根本的に異なるものである。されば吾人は先づ從來の思惟習慣及び自然的立場を全然脱却せねばならない。併し從來の思惟習慣を全く放棄し、吾人の思惟の地平線を狭める精神的周垣をよく認識して之を破壊し、そうして完全なる思惟自由に於て、眞實な又全く新たに呈出される可き哲學問題を正當に捕捉するは、非常に困難なる努力を要する仕事である。しかも今や哲學を嚴密なる學として確立するには、此の困難なる仕事を遂成することが是非必要である。實に現象學の本質の把握、并に其の問題の特有の意義及び一切の他の學問殊に心理學との關係の理解を、甚だ困難ならしめるものは何よりも第一に、自然的經驗立場及び思惟立場とは全く異なる新しき一の立場が必要であると云ふ點である。其の新しき立場に立ちて毫も舊立場即ち自然的立場に後戻りすることなく、自由に活動し、眼前に存するものを其の儘に觀照し、區別し、記述することを學ぶには、特別な困難な實習が必要である

のである。

されば右の新しき世界に進入する非常な困難を、云はゞ一片一片づゝ取り除き得る方法を講ずることは、先づ第一に余輩のなす可き仕事であらねばならぬ。そうして余輩は先づ自然的立場から、吾人に對立するがまゝの世界から、心理學的經驗に於て現はれるがまゝの意識から出發して、夫れに本質的な諸前定を闡明し、夫れより現象學的還元 (die phänomenologische Reduktion) の一方法を案出して、夫れに従ふて一切の自然的研究仕方に屬する認識制限を除き去り、其の仕方に特有の一方的或は偏局的方針を轉向させ、そうして遂に「先驗的」に純化されたる現象の自由なる地平線及び夫れと共に余輩の解する特有の意味での現象學の領域を、確定することゝしたいと思ふ。

尙ほ此處に現象學の概念を一般的に表示する爲めに、現象學と夫れと特に密接なる關係を有し、且つ屢々混同され易き心理學との關係を少しく述べて置きたい。今心理學は一の經驗學である。然るに經驗と云ふ語は普通の意味では二つの意味を有するから、随ふて經驗學も二つの意味を有つて居る。即ち(一)は事實の學と云ふ意味にして、(二)は實在 (Realitäten) の學と云ふ意味である。かくて經驗學としての心理學は事實の學及び實在的事象の學である。

然るに之れに反して純正現象學或は先驗的現象學は先づ事實の學としてゐはなく、本質學 (die

Wesenswissenschaft, die eidetische Wissenschaft) として確立せる可きである。即ち純正現象學は只本質認識 (Wesenserkenntnis) のみを確定せんとする學にして、毫も事實を確定せんとする學ではないのである。そうして夫れに屬する還元即ち心理學的現象から純本質に、或は判斷的思惟に於ては事實的經驗的普遍性から本質普遍性 (Wesensallgemeinheit) に導く還元は本質的還元 (die eidetische Reduktion) である。第二には先驗的現象學の現象は非實在的 (irreal) として特質附けられる。そうして夫れに屬する諸還元、殊に先驗的還元は心理學的現象を、夫れに實在性を與へ、かくて夫れを實在的世界中に入らしめるものから、純化するのである。されば余輩の現象學は實在的現象の本質論ではなく、先驗的に還元されたる現象の本質論である可きである。

詳しく事は後に論述するが、更に現象學の一般的概念を確立する爲めに、尙ほ少しく述べて置きたいことがある。今日普通に行はれて居る學問の一般的分類は、學問を實在學と觀念學と或は經驗學と先天大學 (Realwissenschaften und Idealwissenschaften oder empirische und apriorische Wissenschaften) とに大別するものである。そうして其の標準となつて居るものは實在的と觀念的との對立對 (das Gegensatzpaar) である。然るに余輩は此の對立對に對して事實と本質及び實在的なものと非實在的なものとの二つの對立對を立て、夫れに従ふて事實 (實在) 學と本質 (非實在) 學とを區別せんとする。そうして此の學問分類が實在的と觀念的との對立對に従ふて立てられる實

在學と觀念學との區別よりも正當であることは、後に論述する處によりて明らかに理解されると思ふ。余輩は後に、實在性の概念は依て以て實在的有(das reale Sein)と個別的有(das individuelle Sein)との間に、一の差別が設定されねばならぬ一の基本的限定を要することを示すであらう。そうして一方に於ては實在なるもの、本質認識、他方に於ては非實在なるもの、本質認識が、純正本質への轉移を媒介するのである。尙ほ一切の先驗的に純化されたる體驗は非實在なるものにして、實在的世界中に排置されずに設定されるものなることが、後に示されるであらう。そうして現象學はまさしく其等の非實在なるものを、特異的個別者としてではなく、「本質」に於て研究するのである。

却說以上述べ來りし處によりて見れば、現象學は此處に一の^{本質}本質學として、即ち一の先天學として或は eine eidetische Wissenschaft (純本質學)として、確立する可きものなることが明らかである。されば先づ第一に本質及び本質學に關する基本的考察を述べ、又自然主義或は自然的立場に對して本質認識の原本的特有權を辯護して置くことは、有益であると思はれる。

フッサール氏は夫れより第一部「本質及び本質認識」に於て、右の二つの問題を論述して居るのであるが、此處に悉く同氏の説を述べる暇はないので、直接に社會學方法論と關係を有すると思はれる事實學と本質學との差別及び關係に關する同氏の思想を、考察することを主眼となし、紙

面の許す限り他の方面にも論じ及ぼすことゝしたいと思ふ。尙ほ事實學と本質學との區別及び關係に關する同氏の思想に就て次下述ぶることを、さきに本論文(二)「純正論理學の觀念」中に述べし處の、學問の根本的區別や又經驗學に關する同氏の思想と比較して考察することは、學問論の研究上大に有益であると思ふ。

(五) 事實或は經驗と本質、及び個別的

直觀と本質觀照

フッサール氏の事實學と本質學との區別及び關係に關する思想をよく理解する爲めには、事實と本質及び個別的直觀と本質觀照との區別並に關係に關する同氏の見解を、究明して置くことは甚だ肝要である。それで本節に於ては同氏は事實と本質並に之に相應する個別的直觀と本質觀照とを如何に區別し、又其の間に如何なる關係を認めるかを、一般的に考察することゝする。

此處に先づ自然的認識及び經驗の考察から始めるのが便宜であり且つ必要であると思ふ。夫れ自然的認識は經驗を以て始まり、そうして常に經驗の中に止まる。かくて吾人が「自然的」と稱する理論的立場に於ては、可能的諸研究の總範圍は世界(Welt)と云ふ一語を以て表示される。されば此原始的立場の諸學問は、總て世界の學問であると思ひ得られる。そうして只其等の學問のみ

が支配して居る以上は「眞實有」(wahrhaftes Sein)・「現實有」即ち「實在有」(wirkliches Sein, d. i. reales Sein)の概念と「世界に於ける有」(Sein in der Welt)の概念とは相合致する。

各學問には其の研究の領域として一の對象的領域が對應し、其の一切の認識には其の基礎附けの根元として一定の直觀が對應する。そうして其等の直觀に於て其の領域の對象は自己所與物となり、又少なくとも一部分は原本的所與物となる。自然的認識領域及び其の一切の學問の能與的直觀は自然的經驗にして、そうして根本的な能與的經驗は知覺である。一の實在的なものを原本的に與へたと云ふ事と、之を直觀的に「知覺」すると云ふこととは同一である。吾人は物理的事物に就ては原本的現象を「外部的知覺」に於て有するが、併し記憶及び先見的豫期に於て有するのでない。又吾人は吾人自身並に吾人の意識狀態に就ては、所謂「内部的知覺或は自己知覺」に於て原本的現象を有するが、併し他人及び他人の體驗に就ては、「感情移入」(die Einfühlung)に於て原本的現象を有するのでない。吾人は他人から、彼等の身體的表出に基いて彼等の體驗を洞視する。そうして此の感情移入の洞視は一の直觀的な能與的作用であるが、併し最早原本的な能與的作用でない。他人及び其の心意生活は實に夫れ自身其處にあるとして、又其の身體と其處に合致して意識されるが、併し身體の如くに原本的に與へられるとして意識されない。

世界は可能的經驗及び經驗認識の對象の總體、現實的經驗に基いて正當なる理論的思惟に於て

認識し得られる對象の總體である。そうして世界の諸學問、かくて自然的立場の諸學問は廣狹兩義に於ける總ての所謂自然科學即ち物質的自然の學問である、併し又心理的物理的性質を具有する動物的存在の諸學問、かくて生理學、心理學及び其の他の學問でもある。同様に總ての所謂精神科學即ち歴史、文化諸科學、各種の社會學的學科等も、矢張り自然的立場の學問に屬するのである。但し其等の精神科學は自然科學と同列に置かる可きか又は之れに對立する可きか、或は其等の精神科學は夫れ自身自然科學と認めらる可きか又は本質的に新しき類型の學問として認めらる可きかは、此處では論せず置く。

右に述べし處によりて明らかに推知される如く、經驗學は事實學であるが、今經驗を基礎附ける認識作用は實在的なものを個別的に定置し、空時的に存在するものとして定置する、詳しく云へば此の時間的地位を占め、此の持続性及び實在内容を有するが、併し其の本質上他の時間的地位をも同様に占有し得たる或物として、又此の物理的形態に於て此の場處にあるが、併し其の本質上から考ふれば、同様に何れの他の場處に於て何れの他の形態を裝ふても存在するを得たる或物、又實際には變化しないが併し變化し得る或物、或は實際上變化するならば他の仕方にて變化し得たる或物として定置する。要するに各種の個別的有は、甚だ一般的な云ひ方であるが、偶然的なるものである。夫れは其の本質上他のものであり得たるものである。又一定の自然法則は

夫れに對して妥當し得るが、併しかゝる法則は只事實的規則を表現するだけである。そうして此等の規則は、夫れによりて規制される對象は、夫れ自身に於て考ふれば偶然的なるものであることが、可能的經驗の對象の本質に屬するとして既に前定して居る。

併し此の偶然性即ち事實性は、夫れが一の必然性（即ち空時的事實の結合の一の規則の、單なる事實的存立を云ひ表はすだけでなくして、本質必然性の性質を有し、隨ふて本質普遍性と關係を有する一の必然性）と相關的に結び附けられると云ふ事に於て制限される。さきに述べし如く各事實は其の固有の本質上他の事實であり得たるものであるが、今此の事はつまりまさしく一の本質、かくて純粹に把握さる可き一の純本質^{アイデス}を有すると云ふことが、各偶然性の意義に含まれるものなるを意味する。そうして此の純本質は種々なる普遍性階段の本質眞理（Wesens-|| Wahrheit-||）に從屬するのである。個別的對象は只一般的に一の個別的なるもの、一の此の此處にあるもの、一の一度的なものであるだけでなく、夫れ自身に於てか様か様に形成されたるものとして其の特性を有し、第二次的相對的諸規定が夫れに就て作られる爲めに、夫れに認められねばならぬ本質的諸實位性を保有する。かくて例へば各音は夫れ自身に於て一の本質を有し、又最高階段に於ては音一般の普遍的本質を有する。（但し其の普遍的本質は個別音から觀照し出さる可き一要素として、純粹に理解されるのである。）夫れと全然同様に各物質的事物は其の特有の本質を具

し、そうして最高階段に於て物質的事物一般の普遍的本質を有する。總て個體の本質に屬するものは、他の個體も亦之を有し得る。そうして上の例に於て示されたるが如き種々なる最高本質普遍性は個體の夫れ夫れの「領域」或は「範疇」(“Regionen” oder “Kategorien” von Individuen)を包むのである。

以上述べ來りし處によりて、自然的認識、經驗及び事實とは一般的に如何なるものであるかを説述し、又事實と本質との不可離的關係を指示したが、次に本質及び本質觀照 (Wesensschauung) とは何であるかを、矢張り一般的に説述することとする。

先づ本質とは一個體の自己固有の^{ワイク}有に於て、其の何であるかを表はすとして (als sein Was) 見出されるものを云ふ。然るに總て個體の Was (何であるかを表はすもの) は觀念^{イデア}に於て定置されるのである。要するに經驗的或は個別的直觀は本質觀照或は觀念化 (Wesensschauung oder Ideation) に化成され得るものである。そうして此の可能性は經驗的可能性ではなくして、本質可能性として解さる可きである。されば觀照されたるものは、夫れは最高範疇であるか、又は完全なる具體物に下るまでの其の一特殊化であるかを問はず、夫れに相應する處の純本質^{アイデス}である。

此の本質能與的觀照つまり原本的能與的觀照は、例へば音の本質に於て吾人が容易になし得るが如き充當的なものであり得るが、併し又大なり小なり不完全な即ち不充當的なものでもあり得

る。一定の本質範疇にありては、夫れに屬する本質は只一邊的に與へ得られるだけである。そうして繼續的には多邊的に與へ得られるが、併し決して總邊的に完全に與へ得られないのは當然である。されば夫れと相關して、其等の本質範疇に相應する個別特殊化は、只不充當的經驗的直觀に於て經驗され表象され得るだけである。此の事は事物的なるものに結び附けられる總ての本質に對して妥當する。否な詳しく考察すれば、總ての實在物一般に對して妥當するのである。

個別的直觀は如何なる種類のものであるにせよ、夫れは充當的であるにせよ又然らざるにせよ、總て本質觀照に轉向し得るものである。そうして本質觀照は個別的直觀に應じて充當的でも亦不充當的でもあり得るが、何れにしても一の能與的作用の性質を有して居る。併し此の場合に注目す可きは、本質或は純本質アイデスは一の新しき種類の對象であると云ふことである。個別的或は經驗的直觀の所與物が個別的對象であると同じく、本質觀照の所與物は一の純本質であるのである。

兩者の間には單に外部的類比があるだけでなく、根本的な共通性が存在する。夫れ本質觀照も亦まさしく直觀である。それは丁度純本質的對象が矢張り對象であると同じである。かくて「直觀」及び「對象」と云ふ相關的相屬概念の普遍化は、任意的な思ひ附きでなく、其の本質によりて強制的に要求されるものである。經驗的直觀殊に經驗は一の個別的對象の意識である。夫れは直

觀するとしては個別的對象を所與物として有し、知覺としては之を原本的所與物として有する。丁度それと同様に本質觀照は夫れが眼光を投する或物或は對象の意識、夫れに於て自から與へられるものゝ意識である。かくて本質觀照は直觀である。併し夫れは深い意味或は含蓄の意味に於ての直觀である。夫れは單なる又は漠然たる現在化ではなくして、本質を其の生々する自己性に於て把捉する處の、原本的なる能與的直觀である。尙ほ他方から見れば本質觀照は根本的に特有な新しき種類の直觀である。確かに本質直觀と個別直觀との間には種々なる關係が存在するが、併し兩者は根本的に區別さる可きものである。そうして兩者の本質的區別は、存在（個別的に存在すると云ふ意味にて）と本質（Existenz und Essenz）、事實と純本質^{アイデス}との區別に相應するのである。

併し此處に注意す可きは、「アイドス」即ち純本質は經驗的所與物に於けるとまさしく同様に、空想的所與物に於ても亦具體的に表現され得ると云ふことである。かくて吾人は本質其物を本質的に把捉する爲めに、夫れに相應する經驗的直觀から出發し得る如く、非經驗的な非存在的な、寧ろ單に想像的な直觀からも亦出發し得るのである。そうして此の事と本質的に聯關して注意す可きは、本質の定置、本質の直觀的把捉は毫も個別的存在の定置を含まないと云ふことである。純本質眞理は事實に關する毫末の主張をも含まないので、かくて吾人は只本質眞理のみからは、

最少の事實眞理をも推定す可きでない。

尙ほ更に注意す可きは、本質に關する判斷と、純本質的普遍妥當性の判斷との關係に就てある。本質及び本質事態に關する判斷と、純本質的判斷一般とは、余輩が後者の概念に與へねばならぬ廣がりには於ては、同一のものでない。純本質的認識は其の總ての命題に於て、本質を「に關する對象」とするのでない。そうして之れと密接に結び附けて注意す可きは、是れまで用ひし意味での本質直觀は、經驗或は存在把握に類似し、本質が經驗に於ける個別的なるもの、如くに對象的に把握される意識としては、總ての存在定置を排除して本質を夫れ自身に於て藏する唯一の意識でないことである。本質は「に關する對象」となることなしに、直覺的に意識され、一定の仕方にては又把握され得るのである。

此處に本質に關する判斷と、限定されない一般的仕方に於て、又個體的なるもの、定置を混交せずに、尙ほ個體的なるものに關して、しかも純粹に本質の個性として、「一般」の様式(*Modus des Ueberhaupt*)に於て判斷する判斷との區別に就て考察しよう。例へば吾人は純正幾何學に於ては一般に、直線、角、三角、圓錐曲線等の純本質に關して判斷するのでなく、直線及び角一般に關して、個別的三角一般に關して、圓錐曲線一般に關して判斷するのである。そうしてかゝる一般的判斷は、本質普遍性、「純粹」普遍性、或は「無制約的」普遍性の性質を有するのであ

る。

簡單に論述する爲めに吾人は此處に、一切の餘他の判斷が間接的基礎附けに於て還元される處の「公理」、直接明證的判斷を取扱ふことゝするが、かゝる判斷は其の志向的心理作用的基礎附け (die noetische Begründung) に於て、即ち其の洞見^{アイシヒテヒヤウフンク}化に於て一定の本質觀照を要する。そうして此の本質觀照は又對象化的本質直觀の如くに、本質の個別的諸個性の透視に基づくが、其の經驗に基づくのでない。又此の本質觀照に對しては、單なる空想表象或は寧ろ空想可視性だけで充分であるので、其の可視的なもの或は視られるものは、其の儘で意識され、夫れは「現示」する、併し存在するとして把握されない。例へば吾人が「一の色一般は一の音一般から異なつて居る」と、本質普遍性に於て判斷する時は、夫れに於て右に述べし事は確かめらる可きである。色本質の個別的なるもの及び音本質の個別的なるものは、直覺的に「表象」され、實に其の本質の個別的なるものとして「表象」される。此處に空想直觀 (存在定置なしに) と本質直觀とは同時に又一定の種類に於て現存する。併し其の本質直觀は本質を對象となす處の直觀として現存するのでない。さはれ事の本質上、夫れに對應する客觀化的立場への轉向は常に可能であり、又其の可能性はまさしく一の本質可能性である。そうして立場の變化に従ふて又判斷も變化し、左の如くなるであらう。即ち色本質 (「類」Gattung) は音本質 (「類」) とは異なれるものである。

夫れと逆に、本質に關する各判斷はあるがまゝの此の本質の個性に關する一の無制約的普遍的判斷に、等同的に化成され得る。そうして此の仕方にて純本質諸判斷は、夫れが如何なる論理的形式であるかを問はず、相屬するのである。純本質諸判斷の共通性は、是等の判斷が個體的なるものに關して（まさしく純普遍性に於て）下されたる時でも、何等の個體的有をも^{ガイ}定置しないと云ふことである。

以上述べ來れる處によりて、フッサール氏が事實或は經驗と稱するものと本質と稱するものの區別及び關係、并に此の區別に相應する個別的直觀と稱するものと本質觀照と稱するものの區別及び關係をかなり詳しく究明したのであるが、是れより其等の區別及び關係に基いて立てられたる同氏の事實學と本質學（*Tatsachenwissenschaften und Wesenswissenschaften*）との區別及び關係を考察することとする。